

助動詞

1. may の用法。

(1) 「～するかもしれない」 [推量]

(ex) It may snow tomorrow. 「明日は雪が降るかもしれない」

④ may よりも「確信の度合いが弱い」推量を表すのが might。might は、形は(may の)過去形だが、現在の推量を表す。

実際、助動詞の過去形が(時制の一致以外で)「過去」の意味を表すのは、could と would の一部の用法のみ。

(ex) Don't lock the door. They might not have the key. ④「過去」のことを述べているわけではない。
「ドアに鍵をかけないで。彼らはキーを持っていないかもしれませんから」

ちなみに could は、might よりも更に「確信の度合いが弱い(低い)」推量を表す。

(2) 「～してもよい」 [許可]

(ex) You may go home now. 「さあ、家に帰ってもいいですよ」

You may not feed the animals. 「動物達に餌をやらしないでください」 ④このような「不許可」のmayは注意が必要。詳しくは下記を参照せよ。

「許可の may」に関する注意事項。

④ 「～してもよい」という、「許可」の may を否定した「may not」は「不許可(～してはいけない)」を表す。「許可」にしる「不許可」にしる、may を使うとやや高圧的な感じになるので、「不許可」なら代わりに can't を使うことが多い。また「許可」を与えるには、会話では Sure. Go ahead. とか Yes, of course. などと言うことが多い。

(3) 「譲歩」の may。

譲歩節で may が使われることがある。この may は訳す必要はない。

「Come what may: どんなことがあろうとも」等は決まり文句的に用いる。これは whatever may happen で書き換え可能。

(ex) Come what may, my love will not change. 「どんなことがあっても、僕の愛は変わらない」
=Whatever may happen

(4) 「祈願(～でありますように)」の may。

(ex) May all your Christmases be white! 「ホワイトクリスマスでありますように」

④ May が文頭の疑問文の語順なのに文末尾に! があつたら、この「祈願の may」とみなしたらいい。

(5) may を用いたイディオム。

① may well do~

1. ~するのをもっともだ =have good reason to do~

=It is natural that S+V~

④ この場合の well は「道理に違って」「正当に」「もっともで(に)」という意味。

(ex) You may well get angry with her. 「君が彼女に腹を立てるのもっともだ」

2. たぶん~だろう =S is likely to do~

④ この場合の well は「おそらく(probably)」の意味。

(ex) It may well be true. 「それはたぶん本当だろう」

② may[might] as well do~ (as do...): (...するくらいなら)~した方がいい(ました)

(ex) You might as well throw your money away as lend it to him.
「彼に金を貸すくらいなら、捨てた方がいいよ」

2. can の用法。

(1) 「~できる」 [能力] =be able to

(ex) Can you speak English? 「あなたは英語が話せますか」

Ⓢ can は、will と共に用いることができないので、未来時制では必ず be able to を用いる。

(ex) He will be able to [×can] come tomorrow. 「彼は明日は来れるだろう」

(2) 「~してもよい」 [許可]

(ex) You can use this car any time. 「いつでもこの車を使ってもいいですよ」
Can I use your CD player? 「あなたのCDを使ってもいいですか」

(3) 「~し得る/であり得る」 [可能性]

(ex) Can she say that? 「彼女がそんなことを言う(可能性がある)だろうか」

(4) cannot 「~する(である)はずがない」 [否定的断定]

(ex) The rumor cannot be true. 「その噂が本当であるはずがない」
Ⓢ これは「可能性」の can の否定。

(5) can を用いたイディオム。

① cannot~ too... : 「いくら~しても...しすぎることはない」
=cannot~enough

Ⓢ このイディオムはなかなか意味を理解するのに苦労する。これを解決する裏技は、上記のイディオムは「should do~」で書き換えられる、ということ。

(ex) You cannot be too careful in choosing your friends.
=You should be (very) careful in choosing your friends.

You cannot be too careful in choosing your friends.

「友人を選ぶ際には、注意してしすぎるということはない」

You cannot begin learning a foreign language too early.

「外国語の学習を始めるのに(年齢が)早いに越したことはない」

I love my work; you can't give me too much. 「僕は仕事が好きだ。いくらあってもいい」

I cannot thank you enough. 「お礼の申し上げようがありません」

② cannot help doing~ 「~せずにはいられない」

=cannot but do[原形]~

(ex) I could not help telling her the truth of the matter.
=I could not but tell her the truth of the matter.

「僕は彼女に事の真相を話さずにはいられなかった」

(6)could の用法。 ㊦couldが「過去」を表すのは①の用法の場合のみ。②は仮定法。③～⑥はcanよりも「確信の度合い」が弱まったもの。いずれも内容的には「現在」の内容。

①能力・可能「～できた」

(ex)He could climb trees easily when he was young.
彼は若いころは木に楽々と登ることができた

㊦could と was[were] able to.

1.couldは「～する能力があった」だけであるのに対し、was[were] able to はこの意味に加えて「～する能力があり、かつ実際に行なった」ことも表すことができる。

(ex) My father could[was able to] swim well when he was young.
「父は若いころ泳ぎがうまかった」

㊦そういう能力があったことを示している(永続的能力)。仮定法の could と 混乱しやすいので、上例のように、過去を示す語句なしで「～する能力があった」という意味の could が使われることはまずない。
(もちろん前後関係から過去の内容を指すことが明らかである場合には、そのような語句なしに「過去」を表す could が使われることはありうる)

My father was able to[×could] swim across the river.
「父はその川を泳いで渡ることができた(実際に渡った)」

㊦上例の用に、過去の一回の行為として「～することができた(実際に行った)」という場合には was[were] able to や managed to を用いる。

2.否定文では could も was[were] able to と同じように用いることができる。

(ex) I could not[=was not able to] answer the question.
「私はその質問に答えることができなかった」

3.受身では could が用いられ was[were] able to be+p.p.～という形は使わない

(ex) The door could not[×was not able to] be opened.「そのドアは開けなかった」

②仮定の能力「～しようと思えばできる」 ㊦仮定法のif節が省略されたと考えても良い。現実にはありえない内容と共に用いる。

(ex)I'm so hungry that I could eat a horse.
あんまりおなかがすいて、馬1頭でも食べられそうだ

③可能性・推量「～でありうる」

㊦本来は仮定法過去の用法。会話ではこの用法が多い。canにもこの用法があるが、can(may・might)より確信の度合いが弱い。「ひょっとしたら～だ」くらいの意味。

(ex) “Is it true that he's bought a Rolls Royce?” “It could be.”
「彼がロールスロイスを買ったって、本当かね」 「かもね」

④強い疑い・否定的な推量 [可能性]

㊦疑問文で用い、「一体全体どうして～か」という意味を表す。本来は仮定法過去の用法で、canを使う場合よりもありえないという気持ちが強い。

(ex) How in the world could you do that?
なんだってそんなことをするんだ

㊦「could have+過去分詞」で、過去のことについての推量を表す。

(ex) Who could have borne to see such a scene?

だれがそんな光景を直視できただろうか

You could not have seen Bill because he is still abroad.

君はビルに会ったはずがないよ。彼はまだ外国にいるのだから

㊦cannot have seen とあまり変わらない。

⑤許可

㊦Could I ~? は「~してもよいでしょうか」という意味で、許可を求める丁寧な言い方。

(ex) Could I sit here a minute?ここにちょっと座ってもよいでしょうか

㊦I wonder if I could sit here a minute.とも言う。

応答には Yes, you can. などを用い、Yes, you could. は不可。

⑥依頼その他

㊦Could you ~? の形で、「~していただけませんか」という丁寧な依頼・要請を表す。

(ex) Could you repeat that?もう一度おっしゃってくださいませんか

⑦「could have+p.p.~」。

1. 仮定法過去完了の用法。㊦過去の事実と反する仮定を述べる。

(ex) If you had asked me at that time, I could have told you what happened.

あのとき君が私に聞いてくれたら、何が起きたのか話してあげられたのに

2. 現在・当時から見た過去の推量「~だった(の)かもしれない」

(ex) The answer could have been right. 答は正しかったかもしれない

3. 未来完了(の推量) ≒will have p.p.~

「(~までに)…してしまっているかもしれない」

(ex) By this time next week you could have forgotten all about this.

来週の今頃にはもうこんなことはすっかり忘れてしまっているかもしれないよ

3. must の用法。

(1) 「~しなければならない」 [義務]

(ex) You must come here by noon. 「昼までには君はここにこなくてはならない」

You must come here. 「ぜひ当方へ来てください」

㊦このように、文脈によってはYou mustが「ぜひ~してください」という勧誘になることもある。

(2) 「~する(である)に違いない」 [肯定的断定]

(ex) You must be tired. 「あなたは疲れているに違いない」

㊦must がこのような意味になるのは、原則として後ろに be動詞に代表されるような「状態動詞」を取った場合。

(3) must not do~ 「~してはならない」 [禁止]

(ex) You must not tell a lie. 「ウソをついてはならない」

會 「～しなければならない」「～する(である)に違いない」という意味の must は have to で言い換えることができるが、don't have to は「～しなくてもいい (=need not)」という意味で、must not とは意味が異なる。

(ex) Do you have to go to school today? 「君は今日学校に行かなくてはならないのかい」
Tom has to be kidding. 「トムは冗談を言っているに違いない」
You don't have to come here. 「君はここにこなくていい」 = You need not come here.

4. should [=ought to] の用法。

(1) 「～すべきだ」 [義務]

(ex) You should [=ought to] look after your little brother. 「君は弟の世話をすべきだ」

(2) 「～するはずだ」 [当然]

(ex) They should [=ought to] arrive by ten o'clock. 「彼らは十時までには到着するはずだ」

(3) should の注意すべき3用法。

① 「要求」「主張」「提案」「命令」「決定」を表す動詞や形容詞、名詞(要するに「～せよ」「～した方がいい」といった、相手に対する願望や要求を表すような意味を持つもの)の後の that 節中の動詞は、「(should)+do[原形]」にする。

會 should は省略できるが、その場合、後の動詞は「原形」のままにしておかなくてはならない。

S + Vt + that S + [should] + 動詞の原形 ~.

- ① 要求 (demand「要求する」, require「要求する」, ask「要求する」, request「要求する」等)
- ② 主張 (insist「主張する」, urge「主張する」等)
- ③ 提案 (suggest「提案する」, propose「提案する」, advise「忠告する」, recommend「推薦する」等)
- ④ 命令 (command「命令する」, order「命令する」等)
- ⑤ 決定 (decide「決定する」等)

形容詞(又は名詞) + that S + [should] + 動詞の原形 ~.

necessary「必要な」, urgent「緊急に必要な」, important「重要な」, essential「不可欠な」, pity「哀れみ」
strange「変な」, odd「妙な」, no wonder「当然だ」, natural「当然な」, desirable「望ましい」

(ex) He **insisted** that I (should) **pay** the bill.

「彼は私がおその勘定を払うよう主張した」

It is **necessary** that you (should) **pack and leave** at once.

「君はすぐに荷作りして出かける必要がある」

② 「感情・判断の should」。

1. 疑問詞の後ろに置いて、驚きや意外な気持ちを表わす。「一体 全体」

(ex) How **should** I know? 「一体どうして私が知っているというの」

Why **should** they have died so young? 「一体何故彼らはそんなに若くして死んだのか」

2. 「感情」「判断」を表す形容詞や名詞の後の**that**節内では「**should+do**【原形】」を用いる(この **should** は省略しない)。

(ex) It is **lucky** that the weather **should** be so nice.

天気がこんなにいい[よかった]なんてついている

I was **surprised** that she **should** feel unhappy when she was in London.

彼女がロンドンにいるとみじめな気持ちになるなんて驚いた

It is a **good thing** that he **should** study harder than before.

彼が前よりよく勉強することはいいことだ。

③for fear **S+should[would/might]+do**~. 怖ないように/するといけないので」

(ex) I took my umbrella for fear it **should** rain. 「雨が降るといけないのでかさを持っていった」

Walk quietly for fear you **should** wake her. 「彼女を起こさないように静かに歩きなさい」

5. need の用法。

④**need**には、助動詞の**need**と(一般)動詞の**need**がある。それぞれの用法、その違いが問われやすい。

(1) 「助動詞の**need**」が否定文や疑問文でしか使えないのに対し、「(一般)動詞の**need**」は肯定文でも使える。

「君はもっと一生懸命勉強する必要がある」

○ You **need to** study harder.

× You **need** study harder. ☞助動詞の**need**は肯定文では使えない。

否定文や疑問文では「助動詞の**need**」「(一般)動詞の**need**」両方使えるが、その用法は問題でよく問われる。たとえば「君は来る必要がない」という言い方は、助動詞、一般動詞それぞれの **need** を用いて以下のように書くことができる。

① You **need not** come. [助動詞]

② You **don't need to** come. [(一般)動詞]

④助動詞の否定は、助動詞の後ろに**not**をつけなければならない。つまり助動詞の**need**は「**need not**」が否定形になる。(一般)動詞の場合直前に**don't** [doesn't/didn't]をつけることによって否定文を作るので、(一般)動詞の**need**の場合、**don't**等を直前につけなければならない。更に「～する必要がある」という場合には、「**need to do**」と、**to**不定詞が直後にくる。だから全体は「**don't need to do**」という形になる。以下のような選択肢に引っ掛からないように注意せよ!

× **don't need** come

× **need not to** come

× **need to not** come

(2) 「(一般)動詞の**need**」は目的語に不定詞と動名詞両方とることができるが、それぞれで意味が違って来る。

need { to do~: 「～する必要がある」 [能動]
 doing~: 「～される必要がある」 [受身]

6.will の用法。

(1) 「～だろう」 [単純未来]

(ex) It will rain tomorrow. 「明日は雨が降るだろう」

(2) 「～するつもりだ」 [強い意志・固執]

(ex) I will do my best. 「私はベストを尽くすつもりです」

The door won't [=will not] open. 「そのドアはどうしても開かない」

④このようにwon't [=will not]が強い拒絶の意思を表すことがあり、「物」も主語にとれる。

(3) 「～するものだ」 [現在の習慣・習性]

「どうしても～したがるものだ」

(ex) Accidents will happen. 「事故は起こるものだ」

Boys will be boys. 「子供は子供だ ⇨ 男の子の腕白は仕方がない」

Oil will float on water. 「油は水に浮く」 ④油の習性を強調している

④自然法則で、繰り返される動きには「現在時制」を用いる。

(ex) The sun rises [xwill rise] in the east. 「太陽は東から昇る」

(4) Will you do~? 「～しませんか」 [勧誘・依頼]

=Won't you do~?

「～してください」

④Won't you~?の方が丁寧な表現。

(ex) Will you shut the window? 「窓を閉めてくれますか」

Bring me a glass of water, will you? 「水をいっぱい持ってきてくれるかい」

Won't you have some more coffee? 「コーヒーをもう少しいかがですか」

④Will you do~?が相手の意志を問う(「～しますか」)場合もあるが、その時は文尾を上げて発音する(逆に[勧誘・依頼]の場合には文尾を下げて発音する)。

7.wouldの用法。 ④wouldが「過去」の意味を表すのは(1)~(3)。(4)。(5)は「現在」の仮定や推量を表す。助動詞の過去形が、実際に「過去」の意味を表すのはocouldとwculdの一部の用法においてのみ。

(1) 「～するだろう」「～しよう」 [時制の一致による]

(ex) I think that she will come to the party. 「僕は、彼女がそのパーティーに来るだろうと思う」

⇨ I thought that she would come to the party. 「僕は、彼女がそのパーティーに来るだろうと思った」

(2) 「(どうしても) ~しようとした」 [過去の強い意志]

(ex) The door would not open. 「そのドアはどうしても開かなかった」

(3) 「(昔) よく~したものだ」 [過去の不規則的習慣]

(ex) I would often go fishing in the lake. 「僕はよく湖に釣りに行ったものだ」

④「used to do~」と「would do~」の違い。

①「used to do~」は過去の「規則的習慣」を表し、「would do~」は過去の「不規則的習慣」を表す。だから would は、often 等のような頻度の副詞と一緒に用いることが多いのだ。

(ex) I used to get up early when I was young. 「僕は若いころは早起きだったものだ」

② would は「状態動詞」と一緒に用いない(「動作動詞」と共に用いる)。

× People would believe that the earth was flat.

「人々は地球は平らだと信じていたものだった」

⊗ believe は状態動詞なので、would を「過去の習慣」の意味で使うことは出来ない。

しかし、used to は、「状態動詞」「動作動詞」どちらとも使うことができるので上記の例文は

People used to believe that the earth was flat.

と書き直せば正解になる。

1) used to + 動作動詞: (昔)よく～したものだ [過去の習慣]

2) used to + 状態動詞: (昔)～だった [過去の状態]

特に used to be は was[were] と意味が同じと思っていい。

(ex) He is not what he used to be. 「彼は昔の彼ではない」

= He is not what he was.

③ 現在と対比された文脈では used to を用いる(would は使えない)。

(つまり used to には「今は違うのだが…」というニュアンスが込められる)

(ex) I used to smoke when I was young, but now I don't.

「若いころはタバコを吸ったものだ。しかし今は吸わない」

(4) 仮定法の would。「～するだろうに」

(ex) She would help you if you were here. 「ここにいたら彼女が君を手伝ってくれるだろうに」

(5) 仮定法の would が弱まって意味が転じた would。

① 「非常に丁寧な依頼」を表す

(ex) Would you (please) carry this baggage to the counter?

「この荷物をカウンターまで持って行ってもらえませんか」

② 「(1人称で)好き嫌い」を表す

1. would like to do ~ : ~ したい

2. Would like A to do ~ : A に ~ してほしい

(ex) Would you like me to shut the window? 「私に窓を閉めてほしいですか → 私が窓を閉めましょうか」

3. would rather do [原形] ~ (than do [原形] ...) : (...するより)むしろ ~ したい

= prefer to do ~ (rather than to do ...)

(ex) I would rather stay at home than go shopping in this rain.

「この雨では買い物に行くよりはむしろ家にいた方がいい」

③ 「推測・婉曲」を表す。「～だろう」。

(ex) It would be about a mile from here to town. 「ここから街まで1マイルくらいでしょう」

How old would she be? 「彼女はいったい幾つでしょうか」

I think this would be cheap at 1,000 yen. 「千円ならこれは安いと思います」

⊗ 「実際には知らないが千円だったら…」という意味がある。

8. その他の助動詞。

(1) had better + do [原形] ~ : ~ した方がいい

⊗ 「警告」「脅し」を含意することもあるので、通例目下の者に対して用いる。

(ex) You had better go there. 君はそこに行った方がいい

(2) would rather [sooner] do [原形] ~ (than do [原形] ...): (...するより)むしろ~したい

(ex) I would rather sleep than watch TV. 「テレビを見るよりむしろ寝たい」

(3) How dare S+V ~? :よくも~するものだな ☞相手に対する非難を表す表現。

(ex) How dare you say such a thing to me? 「私に向かってよくもそんなことが言えるものだな」
☞ dareもneedと同じように、疑問文・否定文でしか使わない助動詞だが、受験で出るのはほとんど上記の表現。

(4) Shall I do [原形] ~? :私が~しましょうか

(ex) Shall I open the window? 「私が窓を開けましょうか」

(5) Shall we do [原形] ~? :(一緒に)~しませんか =Let's do [原形] ~!

(ex) Shall we dance? 「ダンスを踊りませんか」

(6) 「強調」の助動詞 do ☞「do+(一般)動詞の原形」の形で用い、動詞を強調する。
「実際」「本当に」「ぜひ」等と訳す。

(ex) "Why didn't you come yesterday?" 「昨日はどうして来なかったんだ」
"But I **did** come." 「いや行ったとも」

9. 「not」の位置に注意すべき助動詞三つ。

(1) 「ought to do [原形] ~」の否定形は「ought not to do [原形] ~」

(ex) You ought not to say such a thing in public. 「人前でそんなことを言うべきではない」
[xought to not]

(2) 「had better do [原形] ~」の否定形は「had better not do [原形] ~」

(ex) You had better not go out by yourself. 「一人で外出しないほうがいい」
[xhad not better]

(3) 「would rather do [原形] ~ (むしろ~したい)」の否定形は「would rather not do [原形] ~」

(ex) I would rather not say anything about politics. 「政治についてはどちらかというと語りたくない」
[xwould not rather]

留意するに「not は不定詞(to do~/do~)の直前に置く」と覚えてほしい。

10. 「助動詞+have+p.p.～」 ☞助動詞の後ろの「have+p.p.～」は“過去の目印”と考えよ!

(1) must	} +have+p.p.～	(1) 「～した [だった] に違いない」
(2) may		(2) 「～した [だった] かも知れない」
(3) can't		(3) 「～した [だった] はずがない」
(4) should ought to had better		(4) 「～すべきだった(のに実際にはしなかった)」
(5) need not		(5) 「～する必要はなかった(のに実際にはした)」

☞should[cught to]+have+p.p.には「(当然)～したはずだ」「(当然)～してしまっているはずなのに(実際にはしていない)」という意味もある。

- (ex) You must have broken the window. 「お前が窓を割ったに違いない」
 I may not have told you to do that, but it's not important.
 「君にそれをするよう言ってなかったかも知れないが、でもそんなことは重要じゃない」
 You can't have met him in the park yesterday, because he has been in Paris since last week.
 「君が昨日公園で彼に会ったはずがない。なぜなら彼は先週からずっとパリにいるからだ」
 I should have telephoned you last Monday, but I was too busy.
 「先週の月曜に君に電話すべきだった(が実際にはできなかった)。でも僕はあまりに忙しかったんだ」
 Their train should have arrived at Manchester by now.
 「彼らの乗った列車は今頃はもうマンチェスターに着いているに違いない(着いているはずだ)」
 She must have felt lonely then, I ought to have been kinder to her.
 「あの時彼女は寂しかったに違いない。僕はもっと彼女に親切にすべきだった」
 You needn't have worried about me at all. 「あなたは僕のことを心配する必要など全くなかったのですよ」

態

1. 受動態の訳と作り方。

受動態とは、受け身のことで「～(さ)れる」「(さ)れている」と訳す。
作り方の基本は、

- (1)元の文の目的語を主語にして、
- (2)動詞を「be動詞+過去分詞」に変え、
- (3)元の文の主語は「～によって」という前置詞の by をつけて文尾に移動する。

(注1):元の文の目的語が受動態における主語になるということは、元々目的語をもっている文しか受動態を作ることはできないということ。

(注2):ただし、いくら目的語があっても、以下のような場合は受動態は作れない。

1.主語から目的語への積極的な働き掛けが弱い動詞の場合 (resemble「似ている」, belong to「所属する」)

2.目的語がoneselfやeach otherの場合

(注3):元の文の目的語が代名詞だった場合、それを主語にする際には、主格に直す。 (ex)me→I

(注4):元の文の主語が代名詞だった場合、byをつける際、目的格に直す。 (ex)He→by him

(注5):助動詞を含む文の受動態は「S+助動詞+be p.p.～」の形になる。その疑問文形は「助動詞+S+be p.p.～?」となる。

(ex) They will finish the work.

→The work will be finished (by them).

→Will the work be finished (by them)?

☞助動詞は「態」が変わっても常に主語の直後に置かれる。

(注6):完了形の受動態は「have[has/had]+been p.p.～」となる。

S + vt + O ⇔ O + be p.p. + by S .

(ex) She loves her husband.

→Her husband is loved by her.

S + vt + O₁ + O₂ ⇔ O₁ + be p.p. + O₂ + by S .

⇔ O₂ + be p.p. + (to) + O₁ + by S .

(ex) The lady gave Mike the money.

→Mike was given the money by the lady.

→The money was given to Mike by the lady.

(注)上例のように、O₁ と O₂ の両方が受動態の主語になれるような動詞は、以下の動詞に限られると見ていい。

give「O₁にO₂を与える」 offer「O₁にO₂を申し出る」 teach「O₁にO₂を教える」

tell「O₁にO₂を話す」 grant「O₁にO₂を与える」

S + vt + O + C ⇔ O + be p.p. + C + by S .

(ex) They elected him captain of the team.

→He was elected captain of the team by them.

S + vi + 前 + O ⇔ O + be p.p. + 前 + by S .

(ex) Mary laughed at him.

→He was laughed at by Mary.

2. 一般の人、人々を表わす語を主語に持つ文は、受動態になっても by～ は省略する。

一般の人、人々を表わす語…we, you, they, people, one

(ex) We should respect freedom of individual. 「我々は個人の自由を尊重すべきだ」

→Freedom of individual should be respected.

その他、以下のような場合も by ~ は省略される。

- ① 行為者が不明瞭な場合 (someone, anyone, no one 等)
- ② 行為者が明白な場合や行為者を言いたくないような場合

3. by 以外の前置詞を用いる受動態。

◎ これらは一種の慣用的な表現としておさえておこう。

- (1) be known $\left\{ \begin{array}{l} \text{to A(人)} : \text{「Aに知られている」} \\ \text{for A(理由)} : \text{「Aで有名だ」} = \text{be famous[noted] for A} \\ \text{as A(人・物)} : \text{「Aとして知られている」} \end{array} \right.$

cf; A man is known by the company he keeps.

「人は自分が持っている仲間で(もって)判断される」→「付き合っている仲間を見ればその人がわかる」

◎ このbyは「判断の基準」を表わずby。受身のbyではないので要注意。

- (2) be interested in A : 「Aに興味がある」
- (3) be surprised[astonished] at A : 「Aに驚く」
- (4) be disappointed with A : 「Aにがっかりする」
- (5) be discouraged at A : 「Aで勇気・希望を失う」
- (6) be pleased with A : 「Aに満足する」
- (7) be satisfied with A : 「Aに満足する」
- (8) be covered with A : 「Aで覆われている」
- (9) be crowded with A : 「Aで混み合っている」
- (10) be engaged in A : 「Aに従事している」
- (11) be occupied with A : 「Aで忙しい」
- (12) be caught in A : 「Aに遭(あ)う、見舞われる」
(ex) be caught in a shower 「にわか雨に遭う」
- (13) be absorbed in A : 「Aに夢中になる」
- (14) be acquainted with A : 「Aと知り合いである」
- (15) be terrified of A : 「Aを恐がる」 = be scared of A
- (16) be killed in A : 「Aで死ぬ」
- (17) be filled with A : 「Aで満たされている」
- (18) be convinced of A : 「Aを確信している」
- (19) be excited at A : 「Aで興奮する」

4. その他の受動態を用いた慣用表現。

- (1) A(製品) be made of B(材料): AはBでできている

◎ できた製品をみて元の形がわかる場合にofを用いる。

(ex) This desk is made of wood. この机は木でできている

- (2) A(製品) be made from B(原料): AはBでできている

◎ 加工をされていて、できた製品から元の形が(見ただけでは)わからない場合にfromを用いる。

(ex) Sake is made from rice. 酒は米でできている

- (3) A(原材料) be made into B(製品): AはBになる

◎ intoを「→」つまり、左から右に向かう矢印と考えるといい。ちなみにofやfromは「←」と考えるといい。

(ex) The strawberries were made into jam. そのイチゴはジャムになった

→

(4)A(意見など) be based on B(事実など):AはBに基づいている

(5)be opposed to A:Aには反対だ

(6)be supposed to do~:

①~すると思われている

(ex) He is supposed to be guilty. 彼は有罪だと思われている

②~することになっている、するはずだ、~しなければならない

(ex) You are supposed to come at 7 o'clock. 君は7時に来ることになっている → 7時に来て下さい
I am supposed to leave now. 私はもう出発しなければなりません
Everybody is supposed to observe traffic regulations.
誰もが交通規則を守らなければならない

③[否定文で]~してはいけないことになっている

(ex) You are not supposed to smoke in this room. この部屋では禁煙になっている

(7)be scheduled to do~:~する予定だ

=be slated to do~

5. 群動詞の受動態。

複数の語句がひとかたまりで、ある特別な意味を表す動詞句(群動詞)を含む英文を受動態にする場合、その群動詞全体を一つの他動詞とみなし、ワンセットで移動させる。

(ex) He laughed at me. 彼は私を笑った

たとえば上の英文の場合、laugh at ワンセットで「~を笑う」という意味を表す。したがって laugh at ワンセットでひとつの「他動詞」と判断し、受動態を作る際もワンセットで移動させる(つまりバラバラにしない)。

→ I was laughed at by him. 私は彼に笑われた

at と by という前置詞が連続して、一見違和感があるが、問題ないのである。以下に、それ全体をひとつの他動詞とみなすような群動詞の具体例を見てみよう。

(1)自動詞+前置詞

(ex) laugh at A :「Aを笑う」 lock into A:「Aを調べる」
send for A :「Aを呼びにやる」 deal with A:「Aを処理する、扱う」
bring about A:「Aをもたらす」 keep on A :「Aを身につける」

(ex) The parents sent for the doctor. 「両親は医者を呼びにやった」
→The doctor was sent for by the parents.

(2)他動詞+名詞+前置詞

(ex) take care of A :「Aの世話をする」 do away with A :「Aを取りのぞく」
look forward to A :「Aを楽しみにして待つ」 make use of A :「Aを利用する」
lose sight of A :「Aを見失う」 find fault with A :「Aを非難する」
pay attention to A:「Aに注意する」 take advantage of A:「Aを利用する」

(ex) I must take care of my dog. 「私は犬の世話をしなければならない」
→My dog must be taken care of by me.

◎「他動詞+名詞+前置詞」型の動詞句では、他動詞の後の名詞を主語にして受動態を作れるものもある。

